

ReverseNoise 2016 Summer

『咲夜』 VS エロトラップ



成人指定
18歳未満閲覧禁止

咲夜 VS エロトラップ

紅魔館に突如現れた地下への階段……

それは時空の歪みで繋がった異界への入口だった。

レミリアに調査を命じられた咲夜は

単身ダンジョンへ乗り込む……

そこに数々の卑劣な罠が

待ち構えるとも知らずに——

★ 今回の基本ルール ★

絶頂回数 ÷ 10 → ダメージ
(小数点以下切り上げ)



地下一階

階段を二歩ずつ降りていく毎に空気が濁り、不快感を抱く湿気が身体に纏わり付いてくる。

「やはり、ただの地下室というわけではなさそうね……」

咲夜は少し緊張した顔つきで手持ちのナイフを確認しながら歩みを進めていく。3階分くらいはあっただろうか、長い階段を降りきった先には……紅魔館によく似た内装の廊下が広がっていた。しかし見た目こそ似ているものの、その構造は紅魔館内部の作りを知り尽くしている咲夜でも見慣れないものだ。目に入る範囲で確認できるだけでも廊下は入り組んでおり、そしていくつもの扉がある。

「はあ……ひとつひとつ調べるしかない……か」

そうボヤキながら、咲夜は手始めに近くにある扉に手をかけた。

「ここは……寝室？」

古ぼけた調度品に飾られた部屋の中央には、大き目のベッドが鎮座していた。この様な場所ではあるが、家具に埃は被っていない。人が生活している様な気配はしないが誰かが掃除でもしているのだろうか。ふと咲夜はシャツが少し乱れている事に気が付いた。

「紅魔館の内装を真似るのですしたら、ベッドメイクくらいは、きちんとしてもらいたいですわね」

メイドのサガだろうか。油断した、というわけではないが咲夜は先ほどまで張り詰めていた緊張をほんの少し緩めてシャツに手をかける。

その瞬間、ベッドだと思っていたものは生物の様に蠢き始め、瞬く間に咲夜の手を絡め取りベッドの上へと引きずり込んだ。

「くっ……気色の悪いっ!!」

いつの間にか両足首にも絡んだ触手に四肢を引っ張られ咲夜はベッドの上に大の字で拘束されてしまう。いや、ベッドだったというべきであろうか。今では無数の触手によって形成された蠢く台座と化している。うじゅるうじゅると粘液が音を立て織り重なる触手達が、やがて咲夜の全身を管め回すかの様に絡み付いてきた。

「まずいわ……いきなりちよつとピンチかも……んんんっ!!」

スカートの下から突然湧き上がった感触に思わず声を上げる咲夜。どうやら粘液塗れの触手がショーツの上から咲夜の秘部をなぞり上げている様だった。

「や……やめなさい……一体なにを……」

ショーツが粘液でびったりと肌に張り付いているのが見るまでもなく判る。というか触手の触れた箇所がやけに過敏になっている様だった。

「胸に……まで……そっそこはっ!! ひあんっっ!!」

咲夜の豊満な双丘に絡みついた触手がその頂まで辿り着く。知能など無さそうな原始的な生物に見えるのに、何故こうも的確に咲夜の弱い部位ばかり攻め立てるのだろうか。

「ふあ……♡ だめ……そこはあ♡ くっ……ん♡」

手足の自由を奪われ為す術もないまま、咲夜は耐えるしかなかった。全身から湧き上がる性的な快感……身も心も任せたい欲求に必死に抵抗を続けながら身体をくねらせ反撃の機会を伺う咲夜。善戦虚しく絶頂を迎えそうになったその瞬間、急に手足の拘束を解かれ自由の身となった。

「あっ♡ ああ♡ ……え？」

快感に打ち震える身体をなんとか起こし、間合いを取って再度の攻撃に備える。しかし振り返ったそこには最初にこの部屋を訪れた時と同じ様な少し乱れたベッドがあるだけだった。

「はあ……先を急ぎましょう。まだ全然調査は進んでいませんし」

着衣の乱れを直しながら咲夜は扉を開けて次の部屋へと向かった。全身ぬるぬると湿った衣服。触手に翻られた乳首は疼き、下腹部からは熱い衝動がこみ上げてくる。

（意識してしまえば余計に……）

気を強く持ち、なんとか平静を装う咲夜だった……

HP 50/50

B1

触手ベッドだ！四肢拘束され、全身をいやらしく愛撫される！



地下二階

咲夜は宙吊りにされていた。この部屋の中央でトラップにかかり、両腕を縛り上げられたのだ。なんとか抜け出そうと懸命にもがくが、縄は緩むどころか咲夜自身の肌への食い込みを増すだけだった。

「少し落ち着いて対策を考えた方が良さそうね……」

暴れるのを止めた咲夜の背後から何かを引きずる様な音がする……振り返るとそこには台座の様な物体が誰が運ぶわけでもないのに独りで動いてこちらに向かつてきていた。

「鞍みたいな形ね？ ご丁寧に座らせてくれでもするのかしら」

台座の上部は鞍の様な形をして人が座れそうになっている。腕も痺れてきていた咲夜は真下にまできた台座にひとまず腰を下ろした。瞬間、股間部分に何か競り上がってくる感触を受け、咲夜は思わず身をよじる！

「えっ!? 鞍から何か生えてきた?」

それはデイルドーだった。ローションに塗れて黒光りするそれが的確に咲夜の秘所に向かってくる! 咲夜がイヤイヤと身体を左右に振る事が、逆にデイルドーの侵入を自ら受け入れる結果になってしまった。

「やあ……んう♥ ぬるつと挿入っちゃ……んんんっつ!!」

突如、咲夜は後ろから大きく突き上げられ前のめりになる。その勢いのままデイルドーが膣奥に叩きつけられ、思わず声が上がった。咲夜はロデオマシンの存在を知らなかった。そのため不意に動きだしたその動きに半ばパニック状態に陥っている。しかしそんな事はお構いなしにロデオマシンは容赦なく咲夜を突き上げる!

「あっ♥ ひあっ♥ そんなっ♥ 突き上げちゃっつ♥♥」

ロデオマシンの動作に合わせて咲夜の嬌声が部屋に鳴り響く。前の階で中途半端に高められていた事もあり、咲夜は容易く最初の絶頂を迎えてしまう。

「あ♥ あ♥ だめっ♥ いっ♥ イクっ♥ イクうううツツ♥♥♥」

激しく潮を吹きながら咲夜は大きくのけぞった。膣肉が収縮しデイルドーをガッチリとくわえ込む! しかしその注挿は無情にも止まらない。絶頂で敏感となった咲夜の膣奥を変わず機械的に打ち続ける!

「んんっ♥ イっ♥ イってるのにつ♥」

止まるどころか動作が速くなっている気すらする。実は、この淫魔のロデオマシンは使用者が絶頂する毎にモードが二段階強くなるのであった。

デイルドーを自ら強く締めつけている事もあり、咲夜の秘肉から受ける快感はさらに上がっていた。

「イったツ♥ ばかりツ♥ なのにツ♥ ひっ♥ ひあッ♥」

脳内を駆け巡る絶頂の快感が抜け切らないまま、咲夜は再び登り詰めようとしていた。

「まっ♥ またあっ♥ ~~~~~ツツツ♥♥♥」

声にならない叫びを上げながら二度目の絶頂を迎えた咲夜。それと同時に、ロデオマシンは二段階ギアをさらに上げる――

「ふああ……んあ……もう……やめてえ……」

膣奥を大きく突き上げるデイルドーに為すがままになっていた。すでに身体には力が入らず、頭もボヤけて思考がまとまらない。それがフェイクとも知らず、自らの意思と関係なく精を搾りたがって啜え込んだデイルドーを締め付ける秘肉の感触と、最奥に叩きつけられる度に子宮から湧き上がってくる精への渴望。それだけが咲夜を支配していた。

「またっ♥ 大きいのっ♥ キちゃうツ♥♥」

ほぼイキつばなしの様な状態でも波はある。7度めの大きな波を迎えようとしていた咲夜は、口を大きく開き涎を垂れ流しながらその瞬間を待ち構えた。

「あ♥ あ♥ ああああああツツツ♥♥♥♥」

これまでと違いロデオマシンが突き上げたままの状態で停止した。最奥までずっぽりと蜜垂を埋め尽くしたデイルドーの感触を味わいながら、咲夜は絶頂の快感に全身を震わせる。どれくらいの時が経っただろうか。いつの間にか両腕の縄が外されていた事に気づいた咲夜は、ロデオマシンに手を着き、ゆつくりと腰を上げデイルドーを引き抜く。

「んう………♥」

自ら撒き散らした愛液で濡れた床に降り立ち、最低限の身なりを整えて、フラフラと次の階を目指す咲夜だった。

HP 50/50

B2

淫魔のロデオマシンだ！
両手を頭の上で拘束され、サドルに装着されたデイルドが子宮を激しく抉る！
時間と共に動きは激しさを増していき、許しを乞いながら7回もめってしまった！

地下三階

ぼたり……

「ん……水漏れ？」

廊下を歩いている際に鼻先に落ちてきた水滴に、足を止め天井を見上げる咲夜。しかしこの何気ない行動がいけなかった。

「敵っ!! きゃああっ!!」

頭上から襲ってきた触手の二団をモロに顔で受け止めてしまった咲夜は、視界を奪われ慌てふためきながらその場に膝を着く。粘液塗れの触手が胸へ、腰へ、太ももへと雪崩れ込む様に纏わりついていった。

「うええ……顔中どろどろだわ……」

全身に散らばった分、数の減った触手を払い除けなんとか視界を確保する咲夜。粘液に塗れたその頬が赤らんできている事に、まだ咲夜自身は気づいていなかった。

「幸い、殺傷能力はなさそうね……ああもう! 身体中に……」

立ち上がって、全身に纏わり着く触手を振りほどこうとしたその時、ふと力が抜け咲夜は地べたに座り込んでしまう。無造作に開かれた両足の付け根からはスカートの中のショーツが顔を見せ、普段の瀟洒な佇まいはすっかり影を潜めていた。

「あれ……力が……入らな……んんっ!!」

力なく開いた口に、一本の触手が身を滑り込ませる。不意の出来事に咲夜は思わず唾を飲み込んだ。触手の粘液と一緒に……瞬く間に身体の内奥が熱を帯び、熱く疼きだす。頭の中ではマズいと解つていても、咲夜は何度も何度も粘液を飲み下していた。

「あ………はぁ♥」

口の中で嘗め回していた触手が離れるのを名残惜しそうに見つめる。咲夜のその目は虚ろで戦闘の意思は完全に消えていた。触手の粘液が隅々まで染み込んだブラウスが肌に張り付き、激しく勃起した乳首がブラジャー越しでもその存在を高らかに主張する。咲夜を襲った触手の粘液は、より強力な催淫効果を持つている様だ。皮膚から吸収しただけでも腰が抜ける

ほどのそれを大量に飲み干してしまった咲夜は、すっかり触手の虜と成り果てていた。

「そ……そこお♥ 早くして……狂っちゃう……♥」

一本の触手が粘液と愛液塗れになったショーツを器用にずらし、咲夜の秘裂へと辿り着いた。まるで焦らしているかのごとく念入りに自らの分泌液を擦り付ける触手。すでに理性が吹き飛んでいる咲夜は、はしたなくおねだりの声をあげた。

「んんっ♥ そっちもお?」

さらに一本の触手が、咲夜の後ろの蕾に狙いをつける。品定めをするかの様に円を描いて先端を擦り付ける。皺の二本二本に粘液が染み込み、括約筋が緩んでいくその様は、まるで早く欲しくて口をパクパクさせている風にも見えた。

「あっ♥ あああああんんっ♥♥♥」

前後の穴を愛撫していた二本の触手が、まるで申し合わせたかの如く同時に咲夜を貫いた。待ち焦がれていた感覚に咲夜は悦びの声を上げる。

「あんっ♥ もつとお♥ ぐちよぐちよにしてえ♥」

ヴァギナから、アヌスから、そして全身を撫で回す触手達の刺激……今この激しく頭を揺さぶる快感が、最早どこから来ているのか判らないほど、咲夜は今までに味わった事のない感覚に浸っていた。

「あ♥ すっ♥ 凄いのっ♥ 来るっ♥ キちゃうっ♥」

全身から伝わってくる快感が大きくなうねりとなり、今まさに咲夜を飲み込もうとしていた、その時――

――シヤアアアアア……

触手が攻め立てるそのすぐ上方から放物線が描かれた。あまりの快感に咲夜は失禁してしまったのだった。

「おっ♥ おしっこしなが……らああああああああ♥♥♥♥♥」

止まらない排出に身を震わせながら咲夜は激しいオルガスムスを迎えた。ピンッと硬直させた四肢が快感の強さを全身で表現する。あまりに強い絶頂に咲夜は小一時間浸っていた……

HP 49/50

B3

とろ～ん

媚薬ローションの滴る触手が突然襲ってきた！
ぬるぬるの触手に両穴を激しく犯され、失禁しながらっつてしまった！
〔状態「催淫」〕



1回絶頂(dmg 1)

催淫(絶頂回数2倍化)

地下四階

「はー……♥ ん……はあ♥」

頬を紅潮させた咲夜は、おぼつかない足取りで探索を続けていた。前の階で襲われた触手の持つ催淫粘液の効果はかなりの持続性がある様で、諦めて先に進む事にした咲夜だったが、新たな快楽を求めて先に進まざるを得なかったというのが本心であろう。

「流石に下着の替えなんかは用意してこなかったわね……」

すり合わせた内股からは止め処なく愛液が滴り落ちていく。濡れた衣服は乾いても、ショーツだけは乾く間もなく内側から染み出してくる愛液で常にぐしょぐしょだった。股間にびったりと張り付く布に不快感を覚えながら咲夜は次の部屋の扉を開けた。

「ここは……私の部屋!？」

扉の向こうは咲夜の部屋だった。いや、咲夜の部屋を模した部屋というべきであろうか。紅魔館の庭を望めるはずの窓の先は石壁で埋まっており、ここが地下なのだと再認識させられる。

「内装だけでなく人の部屋まで真似るとは……いい趣味ですこと」

部屋の中を見回しながら咲夜はため息をついた。ふと、部屋の中の収納タンスが目に入る。

「ひょつとしたら同じ様に中の物も?」

引き出しを開けるとそこには……可愛らしい下着が並べられていた。

「ちよつと!? いったいどこまで真似られてるのよ」

半ば呆れながら咲夜は下着をひとつ手に取った。せつかくだしここで濡れた下着を替えてしまおうかと考えたその矢先に――

「ひつ!? これは……っ!」

手に持った黒いレースの下着がもそもそと蠢き始め咲夜の手に触手を伸ばしてきた。思わず手を離し床に落ちる下着。

「擬態……さっきのベッドと似たようなものかしら」

地下一階で捕らえられた触手ベッドを思い出しながら、咲夜は床に落ちた下着をまじまじと見つめていた。

「これ……もし履いたら一体どうなってしまうの……」

咲夜はゴクリと生唾を飲み込む。正常な思考ならあり得ない事だが、今の咲夜にとっては未知の快楽への好奇心の方がはるかに上回ってしまった。咲夜は震える手でゆつくりと、身に着けているショーツの紐を解く。手を離されたショーツは股間部分の当て布から糸を引きながらハラリと床に落ちた。そして咲夜は目の前のもう一つの下着に静かに手を伸ばす――

もう抑えきれない。咲夜は意を決して手に取ったショーツを身に着けた。

「……ひううつ!!」

布の内側から触手が一齐に蠢き出す。エサを与えられた鯉の様に触手達は咲夜のクリトリスに絡みつき、淫孔に分け入り、アナルに、尿道にまで侵入を開始した。

「ひはっ♥ ああぁ……っ♥」

咲夜は恍惚の表情を浮かべながら快楽の声を上げた。期待通り、いやそれ以上の履き心地にしばし酔いしれた。何回目かの絶頂を迎えた後に咲夜は気づく……

「ぬ……脱げない? んんう……ああんっ♥」

咲夜がショーツを外そうとしても蠢く触手達がそれを拒む様に、より強く咲夜に絡みつき一層激しく攻め立てる! 前のめりに膝から崩れ落ちた咲夜は、ただただ呻き声を上げるしかなかった。

「これ……いつまで続くの……まつ♥ またっ♥ イくうッッ♥♥♥」

虫の息のまま快楽を求め無意識のうちに尻を高く突き出す咲夜。落ちて着いては下着に手をかけ、また激しく攻められるというのを何度も何度も繰り返す。

「先……進まないと……」

観念した咲夜は部屋を後にし、またフラフラと歩き出した。

「んんんんんうううッッ♥♥♥」

通った床にポツポツと絶頂の跡を残しながら――

感度
×2

HP 48/50

B4

催淫

強制的にパンツ型の触手を穿かされた！
下半身にびったりとくっつき、弱点を集中攻撃される！
逃れようのない猛烈な弱点責めに、涎を垂らしながら80回もイカされ続けたしまった！
〔状態「触手服」〕

80回絶頂(dmg 8)

触手服(嗔毎に絶頂dmg 1)

地下五階

「まつ♥ またあつ♥ 激しく膣内をつ♥ をおおツツ♥♥♥」

身に着けた触手のショーツにより、歩きながらこれで何度イカされただろう。かなり疲弊してきた咲夜は、少し落ち着いて休めそうな部屋を探していた。

「こ……この部屋なら……」

そこは居間の様で、テーブルの周りにいくつかのソファが並べられていた。身体を引きずるように歩みを進め、なんとか辿り着いたソファのひとつに深く身を沈める。そこで大きく息を吐いた。

「はあ……しばらくここで休憩を——」

ガシャンッ！ ガシャンッ！

ソファから飛び出した枷が咲夜の両手両脚の自由を奪う！ 突然の出来事に戸惑う咲夜。そこへ何かが高速回転する様な高周波の機械音が聞こえてきた

「ひっ!!」

機械音の正体は咲夜の脚の間から現れた。ソファの中央部がぱつくりと開き、中から出てきた丸鋸の様な物が飛沫を上げ回転したままゆつくりと咲夜の方へ近づいてくる……。このままでは危ない。身の危険を感じた咲夜は必死にもがくが両手両脚を固定されているは逃げる事も敵わなかった。

「嘘でしょう……と……止まって……んひひひひッ!!」

身体が引き裂かれる、そう覚悟した瞬間に咲夜の身体に強烈な快感が走った。丸鋸が高速回転したまま咲夜のクレバスを少々手荒になぞり上げる！ この丸鋸は柔らかな素材でできていて、しかも媚薬ローションで覆われた快楽拷問道具だったのだ。

「ああああああああああつツ♥♥♥♥」

無数の突起がショーツの上から次々に咲夜の敏感な部分を刺激していく。その時、ショーツが中央から独りでに開き、露にされたクリトリスへの直接マッサージが開始された。

「じっ♥直はっ♥♥ つつ♥強過ぎるうううつつ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

ローションと愛液が混ざり合い、びちゃびちゃと音を立てて飛沫を飛び散らせる。

「こっ♥ こんな♥ 無理っ♥♥ 無理いいいつつ♥♥♥♥♥」

天を見上げ咲夜は激しく絶頂した。それと同時に丸鋸が下がっていく。

しかし椅子の中に引込められてもなく唸りを上げている丸鋸は、まるで咲夜に落ち着く時間を与えているようだった。なんとか息を整えつつ、咲夜は自分の両腿の間で回転を続ける丸鋸を見つめた。

「……また近づいてくる!!」

先ほどまで激しく咲夜を攻め立てていた丸鋸が再び咲夜に狙いをつけて接近してきた。すでに丸鋸の快感を知ってしまった咲夜は息を呑み、思わず自ら腰を浮かせ突き出してしまう。

「どうせ逃げられないんだし……」

快感の虜になっている咲夜にとって、手足に枷をされたこの状態は、自分を納得させる尤もらしい理由として十分過ぎた。

「はあ……♥ はあ……♥ んんつつ♥ そくおおオオ♥♥」

微妙に腰をずらし、一番気持ちの良いところを探りだす。もはや咲夜にとつてこの椅子は拷問器具ではなく自慰行為の補助器具となっていた。

「すくおいいつつ♥♥ これ凄いのとおおつつ♥♥♥♥♥」

腰を前後させ刺激に強弱を付ける。手足は不自由という状況がより大胆な腰使いを引き出していく。

「おおあつ♥♥♥ んんんああああああつツツ♥♥♥♥♥♥♥♥」

全身を震わせ獣の様な叫びを上げ激しく絶頂する咲夜。丸鋸が再び椅子の中へと納まり、手枷足枷が外されるまで、咲夜は何度も何度もイキ続けた……

感度
×2

HP 39/50

B5

催淫/触手服

座った椅子は淫魔の拷問椅子だった！
股間に押し付けられた媚薬ローションの滴るシリコン丸鋸が、
クリ裏を下から激しく抉り上げ、為す術もないまま24回もイッてしまった！



24回絶頂 (dmg 3)

触手服絶頂 (dmg 1)

地下六階

咲夜は慎重に扉を開け、中の様子を伺う。見渡した限りでは特に気になる様な物は置かれていない普通の部屋だ。

「一応念のためあっちの物陰も確認……きやつ!!」

その部屋に踏み入ったところで、咲夜は足を滑らせ床に手を着いた。左右の手の平からぬるりとした冷たい感触が伝わってくる。いつもの咲夜の集中力だったらたとえ周囲に気を取られていても足元に罠を張っていたスライムの存在に気づいていただろう。

「あつ、足が……」

体勢を整えようと踏ん張るが足は滑り、両手を絡みついたスライムに引かれ、四つん這いの格好のまま立ち上がれない。そうこうしている間にも、部屋中に広がっていたスライムの体は捕らえた咲夜の下に集結し、その四肢をどんどん侵食していった。

「引きずり込まれるっ!!」

両手両脚の大半がスライムの中に埋まり身動きの取れない咲夜を、スライムは部屋の中心部にずるずると運び込んだ。四つん這いの体勢のまま上に乗せていた咲夜を、スライムはゆつくりと抱き起こす。

「こんな格好を……っ」

スライムの中で質量が移動しているのが感じられる。咲夜は自分の意思とは関係なく両脚を開かれ、スライムに抱きつくような姿勢を取らされてしまっていた。スカートは捲くれあがり、半透明のスライムの向こうからはその中が丸見えになっている事だろう。

両腕がさらに引きずり込まれ、スライムは咲夜の身体との密着感をさらに高めようとしてきた。液体とも固体とも言えないひんやりとした表面に押し付けられた乳房が、つきたての柔らかな餅の様にその形を変える。

「う……動いてる?」

押し付けられた胸部の表面が左右に引っ張られる感触も束の間、ボタンを弾け飛ばしたブラウスが開かれ、その綺麗な肌が露わにされた。そのままでは終わらず、今度は下方向からブラジャーがめくられていく。ついには咲夜の乳房は直接スライムに密着させられていた。

「なんて器用な……うんっ♥♥」

これだけの事が出来るスライムが、もちろんそのまま終わるわけがなかった。たわわな咲夜の膨らみを揉みしだくかの様にうねり始める。すでに痛いほどビンビンに固くなっている乳房に纏わりつき、こねくり回した。

「や……あ♥ なんでスライムなんかが……こんな上手に♥」

まるで恋人にするかの様に優しく、時には情熱的に激しくスライムは愛撫を繰り返す。同時に、押しつけられた下腹部からショーツを押し分けて侵入してくる感触があった。

「こ……これえ♥ クリちゃん弄られちゃってるっ?」

透明なスライム相手ではその動きを目でハッキリとは確認できないが、下腹部で蠢く確かな質量を感じる。その証拠に、中から押されて不自然に引っ張られたレースの黒下着はぐねぐねと妖しく形を変化させていた。

「お……お願い♥ もう……イかせてえ♥」

たまらなくなった咲夜はスライムに顎を乗せ、おねだりをする。それに呼応したのか乳房やクリトリスに纏わりついているスライムがフィニッシュに向けて動きに一層激しさを増した。

「あ♥ あ♥ それっ♥ それ好きいい♥♥」

咲夜は目を閉じ完全にスライムに身を預ける。スライムの体に包まれている感触にいつしか安心感を覚えながら、咲夜は絶頂を迎えた。

「くっ♥ クるっ♥ キちゃ……ッッッ♥♥♥♥♥」

動かせない手足を強く抱きつかせ、咲夜はプルプルと絶頂の余韻に浸っていた……

感度
×2

HP 35/50

B6

催淫/触手服

スライムに四肢をとられ、抱き着くような姿勢で拘束された！
スライムに押し付けられたクリや乳首を乱暴を責め上げられ、
12回もイカされてしまった！



12回絶頂(dmg 2)

触手服絶頂(dmg 1)

地下七階

咲夜は扉の前に立っていた。このフロアの他の場所は全て調査が済んでいるが、下に降りる階段は見つかっていない。おそらくこの扉の向こうにあるのだろう。

「やつぱり……そういう事なのかしらね」

分厚そうな扉の上には「8」という数字が掲げられていた。そして扉の前には……男性器を模したデイルドーの付いた台座があった。その前面には数字をカウントするであろう文字盤が取り付けられている。

「他にはもう先に進めそうな場所はないし……試しにやってみるしか手はない、か」

デイルドーを手で擦ったり色々やつてはみたものの、一向に扉の開く気配はなかった……これまでの経験から、上に示された回数だけこのデイルドーで絶頂しなければならぬだろうと、咲夜は薄々感づいていた。

身に着けた触手のショーツによつて常に愛撫され続けている咲夜の身体は、いつでも受け入れる準備が出来ていた。意を決した咲夜は台座を跨いでその上に立ち、スカートをたくし上げる。

「こうして見ると……結構大きいわね。それに力りも張つて……」

今からこれを自ら膣内に挿入して……そう考えるだけで先ほどから発情しつばなしな咲夜の淫口は期待の涎の量を増していく。咲夜がゆつくりと腰を下ろしていくと、まるで受け入れを許可するかの様にショーツが開き、蜜が滴る肉壺の入口を露わにした。

「んう……」

デイルドーが熱く湿った膣内に挿入ってくる。肉壁を押し分けてくるその感覚を味わいながら、最奥に突き当たるまで咲夜はゆつくりと腰を落した。

「挿入……ったあ♥」

咲夜が二息ついたその時、突然デイルドーが激しく上下に振動しだす！固定されている台座がガタガタと揺れ、ピストンの激しさを表していた。

「んはっ♥ これっ♥ かっ♥ 勝手に♥ ナカっ♥ えぐつてっ♥」

激しく上下するデイルドーを咲夜は必死に受け止める。容赦なく膣奥に響く衝撃が、咲夜に絶頂をもたらすまでさほどかからなかった。

「く……んッ♥ んんんんっつっつッ♥♥♥」

咲夜は強く目を閉じ身体を身震いさせた。アクメを迎え真っ白になった頭の中に「カシャッ」という機械音が響いてくる。

「はあ……♥ やつぱり……そうだった」

ふと台座に目をやると、数字が「01」にカウントアップされていた。

「このまま続けましょう……んんっ♥」

咲夜は再びアクメを迎えるため、ピストンが一番良いところに当たる様、腰をくねらせた。

「こっ……これでっ♥♥ 終わりいっつ♥♥♥♥」

咲夜は天を仰ぎのけぞりながら8度目の絶頂を迎えた。背後での扉の開く音に、固く閉じた瞼をゆつくりと開けていく。

「開いた……わ。 正解……だったわね」

咲夜は立ちあがろうと力をこめる……だが短時間で8度も続けていった影響で腰は抜け、力の入らない脚はブルブルと震えるだけだった。そんな咲夜の状況など知らないとはかりに、デイルドーは変わらず激しいピストンを続ける！

「もっ♥もうっ♥ イかなくてもイイのにつっ♥♥♥」

踏ん張りが利かなくなった咲夜は堪らず後ろ手に両手を着いて、両脚をだらしなく開脚させる。しかしそれが悪手だった。重心が後ろに移った事により、激しく動くピストンが咲夜のGスポットを直撃する形になってしまったのだ。

「んおおおオオおっツッ♥♥♥♥」

止まらない快感に咲夜ができるのは、目を見開きながら舌を突き出す事だけだった。十数回の絶頂を経て、ようやく床に倒れこんで難を逃れた咲夜は、放心状態で「22」と示されたカウンターを見つめていた……

感度
×2

HP 32/50

B7

催淫/触手服

絶頂カウスターの付いた扉だ！
扉の前の台座に取り付けられたデイルドで8回イカねばならない！
ガニ股で奥まで挿入すると、デイルドが高速ピストンしたし、
14回も余分にイカされた！



22回絶頂(dmg 3)

触手服絶頂(dmg 1)

地下八階

咲夜はブラウスの前を肌蹴たまま歩いていった。以前スライムに襲われた際にボタンが飛ばされてしまい、それからというものの開けたブラウスの隙間から黒い下着に包まれた豊満なバストが顔を出している。幸いにもここに居るのは化物ばかりで人間の男の好奇の目にさらされる事もないため、咲夜自身も開き直っていた。しかし、衣服は時に防御手段となる事をすっかり失念していた咲夜は、改めて気づかされる羽目になる……

「ひっ!!」

突然、咲夜の胸部にクラゲの様な生物が飛びついてきた。しかも2体同時に。お腕の様な形をしたその2体は、そのまま咲夜の豊かな二つの膨らみへと被さるように張り付いている。円状に生えた短い触手が邪魔だとはかりにブラジャーを外へと追い出した。

「おっぱいが……膨らんでる?」

お腕型の中は空洞になっている様で、中の空気が外に吐き出され軽い真空状態になっていた。当然、乳房は外側に向かって引つ張られる事になり咲夜がそう思うのも無理はない。

「くはあん♥♥」

咲夜は予想外の両乳首への刺激で思わず熱い吐息を漏らした。中でどうなっているのか確認はできないが、おそらく触手の口の様なものが乳首にかぶりついているのだろう。まるで赤子が母親の乳を吸う様に……いや、そんな生易しいものではなかった。襷状に形成された表面がゆつくりと蠢き、咲夜の乳首をぞりぞりとなぞり上げてくる。

「ちっ♥ 乳首っ♥ だめえっ♥」

咲夜は何とか乳房からお腕型触手を外そうと試みるが、肌に食い込むほどがつちりと啞え込まれ、外側からどうこうできる気配ではない。そうこうしている内に、お腕の中では触手がより快感を引き出そうとしているのか、時折ひねる様な動きも加え、咲夜の乳首を激しくねぶってきた! 弄られているのが見えない事が逆に神経を感覚に集中してしまうのだろうか、咲夜はたまらず膝を折り、その場にへなへなとしゃがみ込んだ。

胸に被さったお腕の中からヌチヨヌチヨと粘液をまとった卑猥な音が聞こえてくる。全身の感覚が乳首に集中している様にさえ思える中、咲夜はほとんど息を荒げていった。

「嘘っ♥ 乳首……だけでっ♥♥ そんな……♥」

戸惑う咲夜にトドメとばかり、お腕の中で乳首を激しく吸い上げる音が鳴り響く。パキユームされるその感覚に、咲夜の絶頂も引き出されようとしていた。

「あっ♥ あっ♥ こんなっ♥♥ ふああああんんっ♥♥♥♥」

咲夜は大きくのけぞって胸を突き出し身体を震わせる。隠れていて見えないうが、おそらく乳首は今までにないほどに大きく起立している事だろう。

「ほんとに……胸だけで……しかも乳首だけでイカされちゃった……」

しかし、咲夜が絶頂してもお腕型触手の責めは終わらない。敏感となった乳首に更なる責めを繰り返す。それはまるでより強い刺激を引き出すため、乳首を開発しているかのようだった。

「だめっ♥ それ以上したら……っ♥ これっ♥ さっきより気持ちよくなっちゃってるっ♥♥」

乳首から伝わってくる刺激が徐々に徐々に増していくことに未知への恐怖を覚える咲夜。しかしそれと同時に、もはや性器と言っても過言でないくらいの悦楽をくれる様になった自分の乳首をとて愛おしく感じるようにもなっていた。

「また乳首イクっ♥ 乳首アクメ……キメちゃうっ♥♥♥♥」

二つの突起からもたらされるある意味2倍の絶頂に浸りながら、咲夜は幸せそうな顔で涎を垂れ流し悦び震えていた。開発しきったのであろうか、お腕型触手が解放した咲夜の乳首は赤くぶつくりと脹れ、ふるふると揺れる乳房の上で天を見上げていた。

感度
×2

HP 28/50

B8

催淫/触手服

御腕型触手に襲われた！両方のお乳にかっぽりとくっつき、
内側の触手で乳首をいじられ、6回もイッてしまった！

6回絶頂(dmg II)
触手服絶頂(dmg II)

地下九階

咲夜はゆつくりとした足取りで探索を続けていた。慎重に……というわけでもなく、あまり急ぐと前の階でお椀型触手に開発された乳首が衣服に擦れてしまうからである。ただでさえ、身に着けた触手ショーツが時折り激しく責め立てるのだから、これ以上歩きながら絶頂する回数を増やしたくはない。

そんな事を考えながら上の空で歩いていた咲夜は、足元に迫るトラップに気づいていなかった。

「え……なに？」

咲夜の周りの床が円形に鈍い光を放ち出した。普段なら危険を察知して円の外に飛び退いていたかもしれない。しかし今の咲夜には、瞬時に判断できるだけの力は残っていなかった。

「こ……これは一体？　そういうば、パチュリー様に似た様なものを見せて貰った事があつた様な……つまり、何かの術式？」

よく見れば床には薄つすらと魔方陣が書かれていた。魔方陣が発する光が段々と強くなり、そして咲夜を囲う形で空中に浮かび上がる。立ちすくむ咲夜の下腹部にその光が収束していき……光は咲夜の身体に飲み込まれながらゆつくりと消えた。

ドクンツツ!!

次の瞬間、咲夜は下腹部から全身に広がる強い衝動を覚えた。じわじわと熱が身体の隅々まで伝わって行き、身体は高潮して汗ばんでくる。鼓動は早くなり息遣いも荒くなってきた。

「身体が……熱い……ん♥」

地下の探索を開始してからというもの、様々な要因により性衝動を高められてきた咲夜だったが、今回は最も単純で直接的だった。

『男の精を受けたい』

子宮が発するその強い命令に咲夜の全身は否が応でも反応をする。服の上からでは確認できないが咲夜の下腹部、子宮のある場所には、くつきり

とした紋様が浮かび上がっていた。

『絶頂淫紋』……咲夜が受けた術式は子宮に埋め込まれ、抗えないほどの強い性欲求を対象に発生させる。性的な感度は高まり、特に子宮内に精を受けた際には相当な強さの絶頂を伴うというものだった。

「はぁ♥ はぁ♥ どうしたの私の身体……」

すでに下着は染み出した愛液で飽和状態だった。薄い布地では保持しきれず、溢れ出した透明な液体が半開きになった脚の間を伝わっていく。

「このままじゃ……我慢……でき……んんん♥♥♥」

大量の愛液に反応したのか咲夜の期待に応えたのか、触手ショーツが再び活動を開始した。今回攻めるべき部分を解っているのか、布地の裏側から生えた触手がヒクついた咲夜のクレバスをめがけてどんどん侵入していく。

「おっ♥ おくうウウ♥♥ ぐにぐにつてええ♥♥♥」

代わる代わる子宮口を撫で回す触手達に、咲夜は恍惚の表情を浮かべ激しく身悶えた。

「イクっ♥♥♥ 子宮降りてきちゃってるっ♥♥♥」

咲夜は瞳を潤ませながらその瞬間を待つ……

「……はぁぁぁぁぁん♥♥♥♥♥」

触手に膣内を弄られ激しく絶頂する咲夜。咲夜の身体は精を受けようと膣肉を必死に収縮し子宮口を開かせた……が、ショーツ型の触手達はその期待に応える能力を持つてはいなかった。

「あ……イっちゃった……けど……だめ……これじゃ足りない……」

膝立ちのまま肩で息をしながら咲夜は己の身体が満たされていない事に気付かされた。

「先……進まなきゃ……」

よろよろと立ち上がると咲夜は次の階を目指してまた歩き出す。今度の階では……きつと満たされる事を願って。

感度
×2

HP 26/50

B9

催淫/触手服

術式付与の異だ！超強力な潜伏性の絶頂淫紋を
子宮に埋め込まれてしまった！
〔状態「淫紋」〕



触手服絶頂(dmg 1)

淫紋(絶頂回数2倍化(計4倍))

地下十階

「さて、どうしたものかしら……」

咲夜は床から上半身だけを出して埋まっていた。おそらく魔法か何かでできた落とし穴だったのだろう、ちょうど人間一人分のサイズで開いた穴の淵に咲夜はかろうじてしがみつき、落下を止めた。しかし、再び閉じ始めたその穴が咲夜の上半身を固定する形で塞がってしまった、というのがここまでの経緯だ。

「んー……」

両腕で床を突っ張り、なんとか抜け出そうと試みるがどうにも抜け出せない。その時、咲夜のふくらはぎにヌメリとした何者かの感触があった。

「床下に何か……居る？」

こちらからでは確認できないが、この床下はかなり広い空間になっている様で、こうしている咲夜の脚にも地面の感触はなく、宙に浮いていた。

「ひっ!? また……」

気のせいではない、今度は内股の部分をつんつんと触られる感触がした。

咲夜はごくりと唾を飲む……嫌な予感はずでに期待感へと変わっていた。

（こんな身動きできない状況で……襲われたら……）

息を飲んで静かに待つ咲夜の脚に、今度はしつかりと、粘液を纏った何者かが絡みつく。

（き……きたあ♥）

床下には大量の触手が潜んでいた。一本が咲夜に飛び掛ると喉を切ったかのように無数の触手が咲夜の下半身めがけてその身体を伸ばす。触手達は咲夜の足先から上へ上へと登っていき、無防備な咲夜の下腹部へと瞬く間に迫り着いた。

「はっ♥ 早くう……♥」

触手達はショーツの隙間から次々に侵入し、咲夜の敏感な部分の周りを焦らすかの様に撫で回す。周りから肌を引っ張られその口をばつくりと開くヴァギナが、止め処なく涎を滴らせていた。そしてついに一本の触手が咲夜の淫壺へとその身をねじ込んだ。

「くうううんんつつ♥♥♥」

待ち焦がれた感触に、咲夜は子犬の様な悦びの声を上げた。さらにそこへ、膣への注挿を繰り返す触手に倣うかのように、別の触手がその後ろの窄みへと侵入を試みる。

「おほおっ♥ おっ♥おしりにもおつつ♥♥♥」

咲夜は動かせない上半身を左右に大きく振って、下半身から伝わってくる頭がトロける様な刺激を甘受していた。両脚を艶かしく撫で回され、敏感なクリトリスには細い触手が巻きつき、そして肝心な二つの淫穴には触手が交互に出し入れを繰り返す。下半身全体で練り広げられている淫靡なシヨを咲夜はその目で観覧する事はできないが、床下からグチヨグチヨと響いてくるその音は犯されている自分の下半身の様子を想像するのに十分過ぎるほど卑猥なものであった。

「あ♥ おあ♥ あ……つつ♥♥♥♥♥」

天を仰ぐように大きくのけぞって咲夜は全身を硬直させ震わせた。床下から頭に向かつて突き抜ける快楽の信号をひとしきり味わい、咲夜はガクリと頭を垂れ全身を弛緩させる。その時、膣内の触手をギチギチと咥え込んでいた力が緩み、わずかに開いた隙間を目掛けて触手達が殺到した。

「ひぐうツツツツツ!!」

狭い肉門を無理やりにこじ開けられる様な感覚。しかし今の咲夜には痛みを感じるどころか、より一層強烈な快感を与えていた。

「きゅっ♥ 急にっ♥ ナカっ♥ 太くなつてえツツ♥♥♥」

螺旋状に絡んだ3本の触手が目二杯に拡がった咲夜の肉壺を激しく犯す。奥へと突き入れられるその度に咲夜の膣内は触手の形に拡がり、その先の腹部の表面にまで表れていた。

「ひはッ♥ まっ♥またっ♥♥ イっ……くうううツツ♥♥♥♥♥」

自由を奪われたまま何度も何度も強制的に絶頂を迎えさせられる中、咲夜は快楽の声を上げ続けた。

「もうっ♥ もうっ♥ ほへひひよツツ♥♥♥ おおう……」

ついに咲夜は白目を剥いて失神してしまった。だらしなく大口を開け、そこからだらだらと涎を垂らしている。床の上でどうなっているかなど知る由も無い触手達は、意識のない咲夜を飽きるまで犯し続けた……

感度

×4

HP 25/50

B10

催淫/触手服/淫紋

突然床に穴が開き下半身がずっぴり埋まってしまった！
床の下に潜んでいた触手が、下半身を徹底的に捌り続ける！
下半身がとろけそうなほどの快感に、無様な声をあげながらうかされ続け
24回目の絶頂でついに失神してしまった！

24回絶頂(dmg 3)

触手服絶頂(dmg 1)

失神(dmg 5)

地下十一階

落ちた穴は3〜4 mほどの深さだろうか、無機質に冷たい金属製の壁のあちこちに赤や青の小さな光が点っている。突如、壁のあちこちがカパッと開き、中から金属製の縄の様なものがぐねぐねと這い出してきた。

「……機械？」

立ちすくむ咲夜にどんどんと絡み付いてくる、いわば機械触手のひんやりとした感触。表面で妙にテラテラと光っていたのは潤滑油ではなく粘度の高いローションの様だ。

「まさかマッサージでもするつもり？ こんな機械なんかに……」

咲夜が少しガツカリしながらそう呟いた瞬間、首下からパチッと音がし、同時に痺れる様な快感が全身を駆け巡った。

「ひうつ!!」

驚いた咲夜に構わず服の中にまで機械触手は入り込んできた。緊張した面持ちでそれを見つめる咲夜の目の前で、今度は強烈な稲妻が走る!!

「ひぐううううつつ♥♥♥♥♥♥♥♥♥♥」

咲夜のブラウスが、スカートが、一斉にはじけ飛んだ。ブラジャーの紐は千切れ、豊かな二つの膨らみがぶるると震えて顔を出す。触手のシヨーツは危険を察知したのか、すでに部屋の隅へ避難していた。

機械触手の電撃は性感を引き出すよう調整された特別なものだった。

ローション塗れの身体を通して効率良く全身を伝わる電流が咲夜の神経を直接揺さぶり、脳へ快楽の電気信号を送り込ませる。

「かつ♥身体がシビれて……あああん♥」

咲夜は機械触手に太腿を擦られながらピリピリと伝わる微弱な電流に、目を閉じて恍惚の表情を浮かべている。度重なる触手の責めに慣れた自分に機械など……といった考えは電気ショックと共に頭から消え去っていた。

機械触手の微弱電流による性感マッサージに少し物足りなさを覚えて始めた咲夜に、目の前の壁から他とは趣の違う機械触手が伸びてくる。

「これは……♥」

その機械触手の先には極太のバイブが取り付けられていた。目の前に差

し出されたバイブを咲夜は愛おしく舐め回す。つるつとした亀頭部分からカリ首の方へと舌を移動させていくと、そこから先はぶつぶつとした突起が無数に並んでいる。突起の間の溝ひとつひとつに丁寧に舌を差し入れながら、咲夜は期待感を高めていった。

「お願い……来てえ♥」

バイブへの奉仕を終えた咲夜は後ろを向いて尻を突き出し、機械に向かっておねだりをした。すると、先ほどまで身体を撫で回していた機械触手が後ろ手に咲夜を拘束し、太腿に絡んだ触手と共にその身体を宙空へと持ち上げる。刺激を求め妖しくヒク付く咲夜の秘処を見上げ、機械触手は亀頭の先をそのクレバスへとあてがった……

「んうう……ふとおいいいい♥♥」

普通の人間のペニスの倍近くはあろうか、極太バイブを咥え込み咲夜の身体は悦びに震えた。絡みつく咲夜の膣道をバイブが押し分けて進むことに、無数の突起部分が襞状に連なつた膣肉をゴリゴリと刺激していく。

「奥まで……挿入っ……んんんんんツツツ!!」

バイブが最も奥まで辿り着いたところで咲夜は不意に絶頂してしまった。いくら刺激の強い代物だからといって何かがおかしい……。ふと下を見ると、破れたスカートの隙間から淫紋が鈍く光っていた。

バイブには絶頂の魔術が組み込まれていた。それが咲夜の淫紋と相互反応し唐突な絶頂へと導いたのだ。淫紋と反応し絶頂の魔術が活性化したバイブが容赦なく咲夜に打ち込まれる!

「まつ♥ まつてっ♥ これっ♥ すぐっ♥ イツツツ♥♥♥♥♥♥」

最初の一突きに比べればまだ持ったが、今度も5回の注挿であえなく果ててしまった咲夜。苦しそうな咲夜をサポートするためか、全身の機械触手から快楽の電気信号が送られる。先ほどまでは地面がアースとなりある程度の電流を逃がしていたが、宙吊りとなつている今は全ての電流が咲夜の神経を強く刺激していた。

「ふえっ♥ いっ♥ イイツ♥ このままっ♥ ぐっぽぐっぽシてえっ♥♥♥♥♥♥」

強制的に脳内物質が分泌され多幸福感に包まれたまま、咲夜は気持ち良さそうな喘ぎ声を延々と上げ続けていた……

感度

×4

HP 16/50

B11

催淫/触手服/淫紋

足を滑らせ、入ってしまった穴は、堕とし穴だった！
全身を電撃触手に愛撫されながら、絶頂の魔術が組み込まれた
極太パイプ付き機械触手に弱点を突きあげられ、
気持ち良さそうに喘ぎながら29時間もアクメ漬けにされてしまった！

696回絶頂(dmg 70)

触手服絶頂(dmg 1)

29回失神(dmg 145)

咲夜は戦闘不能になりました

◆こんにちはor初めまして、やむっです。
今回の本はtwitterでアップしていたエロトラップ診断絵のまとめです。
まァアップした画像が最初からB5サイズという事で
元々本にするのを想定してはいたんですが。
この手の診断の魅力の一つに
ランダムな理不尽さを楽しむというのがありますが
一冊の本としてある程度の流れを作るのも
面白いんじゃないかなあと想着いて。
なので今回は、開始即終了とかそういうのを
何度か診断を繰り返して避けてます。

◆元々は普通のイラスト本で考えていたんですが、
せっかくだから短編のSSを追加した場合…
よし20Pを28Pに変更すれば収まる！
と、今の形式が決まりました。
エロ小説系を読むのは好きなので、
たまに自分でも書きたくなるんですよ。
文系人間ではないので、中々に難航するんですが。

◆紅魔メンツでエロトラップをやらせるのに
誰が適任かなあと考えて
やっぱり、まずは咲夜さんかな、と。
まァ小悪魔とかパチュリーは触手のアレで
すでに似た様な事をやってるというのがありますが、
小悪魔はレクリエーションだし、ぱっちゃんはどうせ即堕ちだし…
その点、咲夜さんは気丈な感じで適任ですね！

◆今回は絵の方を先に全て描いていて、
そちらでは結構最後まで耐えてた様にも見えましたが、
文章の方は途中から完全に堕ちちゃってますねw
淫紋からは目にハートマーク足したりとか苦肉の対応を…
というか淫紋周りの文章で設定色々マシマシにされちゃったのに
精液系のトラップが無いまま強制送還された咲夜さんは
その後、一体どうなってしまうのか…

では今回はこの辺で。

2016.7 やむっ

『咲夜vsエロトラップ』

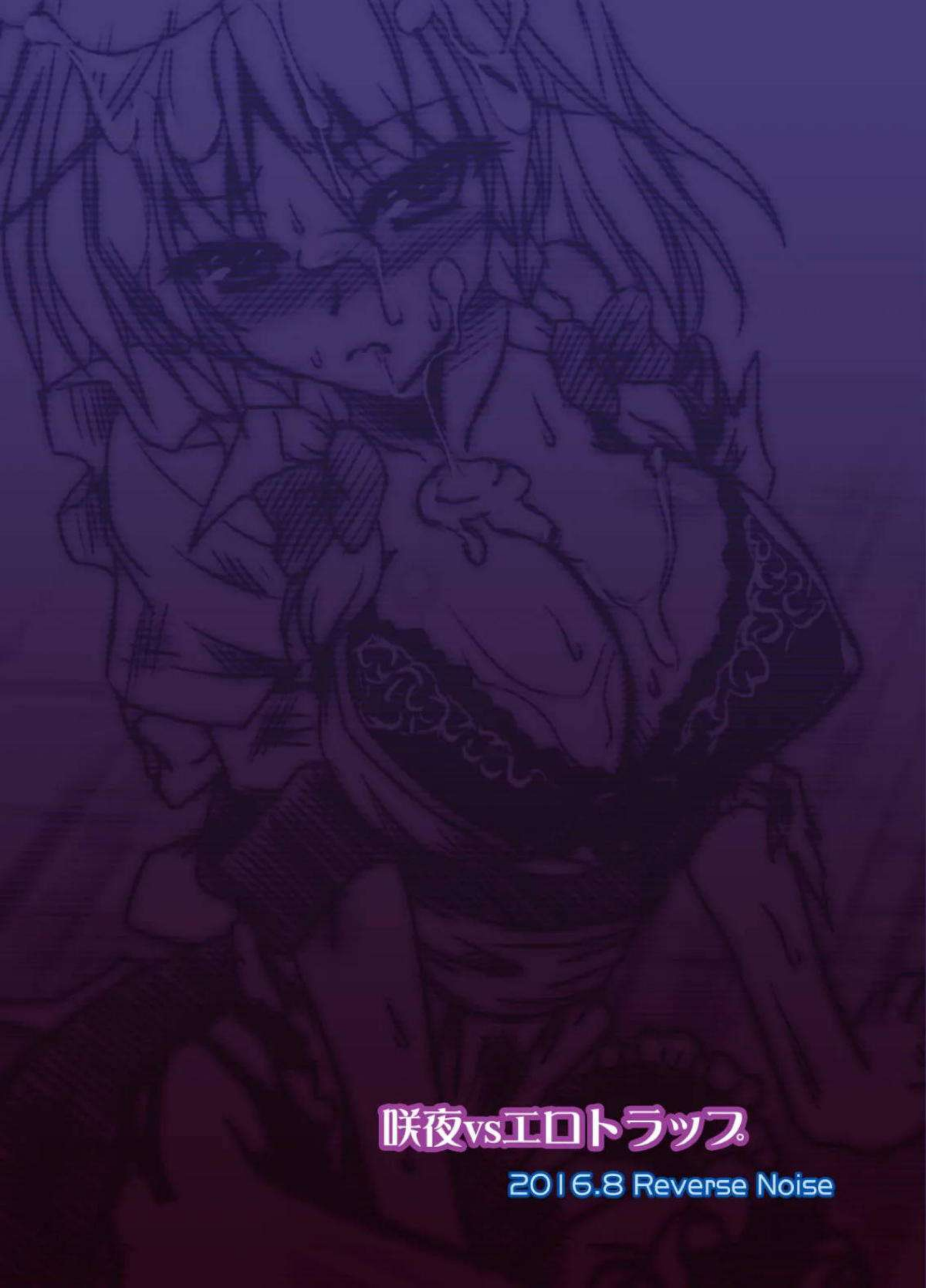
2016/8/13 初版

印刷:ねこのひっぽ様

発行:Reverse Noise

<http://karen.saiin.net/~yamu/>

この本の内容はほぼ全て公開済みなので
無断転載・複写およびネットでのアップロード・共有等の行為を禁止します。
むしろ自分のtwitterかpixiv辺りの画像へリンクを貼ってもらった方が
スキャンしたデータより綺麗だと思います



咲夜vsエロトラップ。

2016.8 Reverse Noise